

解題

経過

文久3年(1863)8月14日、備前の藤本鉄石(津之助)、刈谷藩士松本奎堂(謙三郎)、土佐藩士吉村寅太郎らは、公家の中山忠光を奉じて京を脱出する。その前日には、当時朝廷内で主導権を握っていた尊王攘夷派の奔走により、大和に攘夷祈願の行幸を行う詔勅も出されており、中山らはその先遣隊を自称した。彼らは大阪、堺へと歩を進め、富田林(甲田村)では同志水郡善之祐のもとで武装、五条へ向かう。17日には、要求を容れなかった五条代官を代官所に襲撃して殺害する。そのうえで自ら「政府」を自称した。後世にいう天誅(忠)組である。彼らの目的は、行幸を単なる攘夷祈願に終わらせるのではなく、孝明天皇をいただいた討幕軍に転化させるためであった。大和の国学者伴林光平や、後の北畠男爵となる平岡鳩平もこの時期にこの天誅組に加わっている。

しかし、京では、8月18日、薩摩藩と会津藩がクーデターを執行、攘夷派の後ろ盾であった長州藩を京から放逐し、大和行幸も中止となった。このころ天誅組は十津川郷士らを傘下に加えて軍事を蓄えてはいたものの、後に続くべき本隊を失った。

この後、当初は日和見を決め込んでいた周辺諸藩も、追討側に戻るようになる。天誅組は五条を退去し、高取城を奪取して長期戦に備えようとするも攻撃に失敗、この過程で吉村が味方の銃撃で深手を負うといった奇禍も起きた。諸藩兵に包囲される中、天誅組の方針は脱出―再起論と、十津川に籠っての抗戦継続論との間で、揺れ続けた。吉野の各地において追討諸藩兵との戦いが繰り広げられ、時に戦果をあげることもあったものの、次第に追い詰められていく。また、追いうちをかけるように、中川宮の令旨によって、十津川郷士が離反する。組織的な抗戦は松本、吉村、藤本があいついで戦死した9月下旬までで、あとはちりちりとなって血路を開くしかなかった。

しかし、逃げのびることができ、明治維新を見ることができたものは平岡鳩平らごく少数で、多くは捕縛され刑死、獄死した。中山忠光は長州まで落ちのびることに成功したが、ほどなく殺害されている。なお、この天誅組との連携を意図する中で企画されたのが、平野国臣、澤宣嘉らによる生野の乱である。

天誅組か天忠組か

リストを見ていただければわかるように、書名には「天誅組」と「天忠組」と、両方の表記がある。多くの本にも説明がある通り、当事者は数ある自称のひとつとしては両方を使っており、どちらが正しい、誤りと決めつけることはできない。よりポピ

ュラーなのは天誅組であり、本稿でもこれに従った。ただ、彼らの思想と行動を称揚し、その精神を継承しようとする立場からは、天忠組が好んで使われる傾向にあるようだ。神兵隊事件に連座し大東塾を興した景山正治や、日本浪漫派の保田与重郎などはその典型である。

「天忠」は天、天朝に対する忠誠という意味を持つ一方で、「天誅」は幕末維新期を経て個人に対する暗殺、テロリズムという含意を強く持つようになってしまっている。菊池寛は、天誅組の小説を新聞に連載中、しばしば政治的には対極の位置にあった新選組と混同された、とぼやいている。本展示準備の過程でも似た経験をした。これは、単に「組」という名前の共通面のみではなく、幕末の京都において新撰組が、維新の志士たちとの間でテロの応酬を繰り返していたことと、「天誅」がもつようになった語感とがあわさって、こうした混同が生まれる背景になっているといえる。ことの是非は別にして、歴史的に見る場合、天誅組の画期性が、単なるテロにとどまらず、武力討幕を目指した蜂起、挙兵としての先駆性にある以上、悩ましいところである。

本館の蔵書の特徴

関連資料を本館の蔵書に見る場合、館の設立年代が古いだけあって、天誅組が明治維新の先駆け、義挙と位置づけられ、研究が活発だった昭和戦前期の図書を多く所蔵しているのが強みである。また、奈良県とのかかわりの深い、森田節斎(1811-1868)と伴林光平(1813-1864)に関する本も広くカバーしている。森田は五条出身、昌平黌に学んだ儒者で、直接蜂起には加わらなかったものの、門下から参加者が多かったため事件後は和歌山に潜伏した。伴林はもともと河内国の浄土真宗僧侶であったが、国学を学ぶ中で「もともとこれ神州清潔の民、誤りて仏奴となり同塵を説く、いまにして仏を捨つ」と宣言をして還俗した。文久2年(1863)には、長年の山陵調査を評価され勅を賜っている。平岡鳩平から蜂起を知らされ、天誅組では記録方を努めた。最後に藤本鉄石に託したという記録は伝わっていないが、捕縛後獄中で和歌を織り交ぜながら事件を回顧した『南山踏雲録』は、半田文吉の『大和日記』(刊本の種類によっては松本謙三郎奎堂著とするものもある)と並んで事件の根本史料となっている。

周辺事件の項目には、天誅組に呼応しようとする中で計画が進められた生野の乱に加え、尊皇攘夷思想に基づいて組織された結社などが引き起こし、悲劇的な結末に終わった事件に関する本を集めた。水戸藩の天狗党は、北関東に転戦の後、長駆して当時京都にいた徳川慶喜を頼ろうとするも、その慶喜自身に

処断されている。赤報隊は、戊辰戦争直前、西郷隆盛のもと江戸のかく乱を行っていた相楽総三らが結成。官軍の東山道先鋒隊として、道中で新政府による年貢半減を約束したことが著名であるが、先立つ天誅組も大和で同様の宣撫を行っていた。やがて赤報隊は、「偽官軍」だとされ、相楽らは諏訪で処刑される。隠岐島コミュン(騒動)は、同島道後島で、尊王攘夷思想の影響を受けた名主らが、天朝御料になるからと、戊辰戦争のさなか松江藩の郡代を追放した事件。しかし、新政府はこれを認めなかった。神風連は、維新後のいわゆる不平士族の反乱の一つで、独自の国学思想の影響を受けた士族たちが、熊本鎮台等を襲撃した。

北畠治房とその資料をめぐって

なお、今回の展示に先立って、当館では北畠治房のご子孫木下氏より、関連資料を受贈している。北畠治房は天保4年(1833)生。もともと平岡鳩平を名乗り、中宮寺に仕える一方で、尊王攘夷派の志士と交わり天誅組に参加した。数少ない生き残りとして、一時は水戸天狗党にも関わり、戊辰戦争時には、東征軍大総督となった有栖川宮に従った。維新後は司法畑を歩み、明治24-31年には大阪控訴院長を務めている。退官後は、大正10年(1921)に没するまで、法隆寺村で隠居生活を送った。なお、布穀は治房の号である。

まず、既所蔵の資料から見ていこう。野史台維新史料として公刊された『北畠四位奉答書』は、維新時に接点のあった有栖川宮の台命に答える形で幕末の活動を回顧したもの。他に著作としては、吉野郡丹生川上神社から、天誅組に加わり京都で獄死した橋本若狭綱幸の評伝『橋本若狭小傳』、中宮寺の侍医であり今村文吾の『今村松翁翁略歴』のほか、南北朝期や法隆寺の遺跡に関するものなど、一連の歴史考証に関するものがある。

やや異色なのが、『古蹟辨妄』である。基本的には南北朝期の史跡について考察したものだが、南朝の賀名生御所比定をめぐる伴林光平説を否定する叙述から、95~106丁で幕末における伴林光平と自らの関係についても触れている。ただ、その内容については、鈴木純孝『伴林光平の研究』等が指摘しているように、やや注意を要する。

続いて、今回寄贈された、北畠男爵家関連資料も、治房に関するものが中心で、加えて、一部治房の息子具雄(1854-1925)が衆議院選挙で当選した際のものや、孫の千畝に関するものを含んでいる。

維新に関するものとしては、前述した『北畠四位奉答書』の稿本である88-1-4[北畠治房国事ニ奔走ノ履歴書草稿]がある。

ところどころに修正の書き込みがあり、『北畠四位奉答書』はこの修正を生かす形で印刷、公刊されている。また、時折、「茂曰」といった、書込みも見える。これは、88-1-9-9[琴材遺草]で親交があったことが確認できる森山茂(1842-1919、現榎原市出身の外交官、貴族院議員)と思われる。88-3-1-6[戊辰戦争従軍の口上の覚]は、芸州藩士で維新後は司法畑から立憲改進黨へと、治房と似たコースをたどった藤田高之(1847-1921)による戊辰戦争時の回顧である。

さらに、88-2-12の「御使番」による明治元年6~8月の日記は、江戸(7月17日に東京と改称)における新政府軍構成諸藩の動向を記す。このころ、治房は、『北畠四位奉答書』によれば、東征軍大総督となった有栖川宮に従って江戸へ下り、草莽諸隊や宮の直臣の監察をしていたというので、この日記は治房自身の手によるものとみてよい。

また、治房が足利三代将軍木像梟首事件の前後の状況を回顧した書状控がある(88-2-1)。宛先の「武岡我兄」は神戸の実業家で、天誅組や雪斎に関する著作もある武岡豊太(1864-1931)であろう。

書状控としては、華族を一代限りのものとすべしと訴えていた板垣退助への反論である88-2-7[華族制度に対する意見書]も残っている。但し、治房は、板垣とはこの段階では、「尚一面ノ識ナシ」という。一方、大隈重信との関係は深く、明治14年の政変で大隈が下野した際には、一時これに従い改進黨の結党にも関わった。『大隈重信関係文書』4巻には、治房から大隈への書状が60点収められているが、本文書中には大隈に関するものは見られなかった。88-1-1の歎願書は、孫の千畝が大正13年に朝鮮銀行へ入行し、終戦に至るまで外地での生活を送ったことを記しているが、こうした事情も資料の残存に影響をあたえたのだろう。

歴史考証に関する文書も多い。治房が、平岡から北畠と改姓したのは、南朝の忠臣であった北畠親房の流れをくむという、自らの歴史認識と歴史考証によるものだが、北畠家の家譜やその素材となった系図、親房に関するものなどが本資料中にも見える。また、既所蔵資料では、明治38年の『倉梯山晒風』が、中宮寺とも関係の深い聖徳太子に関するものだが、88-3-1-3の開題[聖徳太子評伝]は、これとは別の内容である。

治房の子具雄(1854-1925)に関するものとしては、第7-9回の衆議院議員選挙で、奈良県郡部選挙区から当選した際の当選証などがある。